

ユニテ

UNITÉ

14



目 次

ロマン・ロランの言葉	1
ロマン・ロランのみたバッハの面影 清 水 茂	2
ロラン＝マルヴィーダ往復書簡(補2) ... 南大路 振一訳	14
ユニテの広場(中村佐多子さんのこと) ... 大 橋 哲 夫	30
ロマン・ロラン研究所から	31
友の会だより	32
あとがき	37
研究所図書目録(7)	(付)



日本・ロマン・ロランの友の会編

ロマン・ロランの言葉

「教科書の修身について」

エコール・ノルマルに入学した際に私がせざるをえなかった、十年間教職につくという契約は、私に教育を強制した。……私は、教育科目表にしたがって、抽象的にやるのではなく、教育を私に託されている労働者や商人の子弟に、具体的に教え説明をするように私が命ぜられている修身教科書を、不幸にして（私の性質からそうせざるをえないので）読んでしまった。そうした階級から（まさにそのJ・B・セー学院から）、殺人的無政府主義の若者・ジュリアン・ソレルともいべきエミール・アンリが出たのだった。それらの少年に向って私が説かなければならない修身の訓えにたいして、彼らがみんな、完全に、根本的に不信であること、偽善的な、ほら吹き、偽信心の少年たちが、「暗誦する」方法という武器で身をかためているのを見て私は驚愕した。もっとも悪いのは、そうした偽りの態度を彼らは少しも苦にしていなかったらしいことだった。教師と生徒が嘘をつくことに、それほど彼らは慣れていたので！いちばん利口な連中、いちばんよく「暗誦した」連中の眼のなかに私は読みとった。「あんただって、ほくと同じように信じちゃいないんだ！」ところで、それは真実、あまりにも真実だった！そうだ、私はそれを信じていなかった。私はそれを信ずることができなかった。そして、私は自分が授業をしなければならぬたびに、それは一つの苦役だった。ノートル・ダム・デ・シャン通りからオーツィユまで、パリの端から端までの長い行程を乗合自動車で行っていたが、——（地下鉄はまだなかった）——精神的にみじめな状態だったが、授業と授業の合間に、学校の近くの森へ冬の大きき大気を呼吸しに行くときには、そのみじめさはいっそうひどかった。私はまさにもう学校へは戻るまい、逃げ出して辞職届を送ろうかと思った。私は自分が偽善の中で教えている少年たちに胸襟をひらいて話せないことをそれほど恥じていた。——（彼らはあまりにもよくそれに適していた。社会全体が彼らには、偽善に見えた、そして人生において彼らの仕事がうまくやるために、それに適応することにはなんの遠慮もしなかった。それこそ本当の問題のように彼らには思われた。）——私は彼らが悪いといっているのではない！決して彼らが悪いではなかった。悪いのはわれわれだった、悪いのは、嘘の中に——立派な言葉の嘘の中で、雄弁的な文学の嘘の中で、偽造し、でっち上げた歴史の嘘の中で、御用哲学の嘘の中、世俗の義務的な道徳の嘘の中で子供を育てる社会である。私にとってもっとも嫌だったのは教科書の修身である……。

宮本正清訳『回想記』から

ロマン・ロランのみたバッハの面影

清水 茂

パリの孤独と疲労困憊とのなかで、クリストフがほとんど《死》に触れかけていたとき、この魂の奥底で彼に語りかけてくる幾つかの芸術作品を、ロマン・ロランは「広場の市」の最後の数ページで明らかにしている。その文章のなかで、ロランはクリストフの芸術的関心の在り方について、このように語っている、——「おそらく漠然とはあるが、彼の本能は、視覚的な諸形式の調和をも聴覚的な諸形式の調和と同じ法則が支配しており、それが生のそれぞれ反対側の二斜面を浸している色彩と音との二つの大河の流れ出る源なのだということに気がついてはいた。しかし、彼はこの二つの斜面の一方しか知らなかったし、目のための王国では、彼は途方に暮れるのであった。」—— そのクリストフがはじめてルーヴルで絵画的なものをもつ深い、神的な魅力にとらえられることになるのは、レンブラントの《よきサマリア人》によってである。レンブラントの作品によって照覚が訪れるというのは、いかにもクリストフに相応しく、また、ロマン・ロランに相応しいと私は思うのであるが、絵画とロランとの関係を理解するうえで、レンブラントの作品が占める位置はきわめて重要なものであることだけを、ここでは示唆しておきたい。ところで、いま幾つかの作品は依然として聴覚的なもの、シューベルトの《未完成交響曲》、およびバッハのカンタータ《いとしい神よ、私はいつ死ぬのですか》(Liebster Gott, wann werd'ich sterben? BWV. 8)の最初のコーラルとカンタータ《われらの主は固き砦》(Ein feste Burg ist unser Gott. BWV. 80)のなかのコーラルの一つである。

飢えと疲労と寒さとに打ちのめされ、絶望の深淵におち込んでゆくことの実感のなかで、クリストフがレンブラントの作品に感じとるのは、この現実世界の惨めさのなかに現存として「居合わせている」神である。そして、シューベルトによって、彼は孤独な《死》に先だつ夢うつつの状態を経験する。——「そして、クリストフはまた、あのべつな音楽がやって来るのを聴いたが、その音楽は燃えるように熱い手もち、

目を閉じ、疲れきった微笑をうかべ、心を嘆息でいっぱいにし、解放のために訪れてくれる死のことを夢想していた。——J=S・バッハのカンタータ《いとしい神よ、私はいつ死ぬのですか》の最初の合唱だった。ゆっくりと波立ちながら、遠い、おぼろげな鐘のどよめきを伴ってひろがってゆく柔かな楽節に心を浸すのはいい気持ちだった。……死ぬこと、大地の平和のなかに溶け込むこと！《Und dann selber Erde werden.》……そして、みずから土になること……」

カンタータ《いとしい神よ、私はいつ死ぬのですか》の導入部合唱はオーボエ・ダモーレによって豊かなメロディーを奏でながら、「私はいつ死ぬのですか」というこの不安な問いを強調する。そして、フルートと通奏低音を奏でる弦とが、死の時を告げる鐘の音を写しとっている。

クリストフはこの死の想念にとらえられながらも、なおそれをふり払おうとして最後の抵抗を試みる。彼はなおも、バッハの音楽に浸されている。しかし、曲想は不安な調子からある確信の表明へとはっきり変っている。そして、彼は《死》そのものである夢魘と格闘する。《死》の深淵をまえにしての、まことに驚くべき生命力である。彼の意志の力は相変らず戦いつづけ悪魔にたいする戦闘の音楽を奏しつづける。——「たとえ世界が悪魔に満ち、われわれを呑み込もうとしても、〔彼らが成功するとは〕われわれは怖れないだろう。」「そして、彼の存在を翻弄している熱い闇の大洋の上に、ふいに一つの屈が、幾筋かの光が、ヴァイオリンとヴィオラとのおだやかなつづやきが、トランペットとホルンの奏でる栄光の静かなひびきがひろがった。同時に、病んでいる魂から、まるで大きな壁みたいにほとんど不動に、確固たる歌が立ちのぼった、J=S・バッハのあるコラールのように。」

《死》の深淵をのぞき見ながら、そこで立ち止るクリストフの、幻覚のなかでのバッハ体験はこの二つのカンタータの一方の冒頭のコラールにはじまり、もう一方の、確固たる信仰表明のコラールに終わっている。『ジャン＝クリストフ』という作品は、ある意味で、《死》と《復活》の物語であり、しばしば、魂が極度の絶望状態のなかで経験する蘇りの場面が描かれているが、ここにもまた、そのもっとも感動的な一つが語られているのである。そして、ロランはその感動の源泉の一つをバッハのカンタータに藉りた。

バッハのカンタータ、— そのことを奇異に思う必要があるだろうか。

もし、音楽に関するロマン・ロランの著作のなかで、ベートーヴェンについての研究のあの荘大な大聖堂ほどではないにしても、せめて『ヘンデル』の一冊に匹敵する分量のものが、あるいは「ヨハン＝セバスティアン・バッハの好敵手」であったテレマンに関する一章に釣り合うだけの数ページが、偉大なバッハに捧げられていたら、こんなふうには書きはじめる必要はなかったかもしれないと考えられる。

しかし、クリストフに関しても、また、ロラン自身に関しても、このことはまったく驚くに値しない。なぜならば、クリストフについていえば、音楽好きな『ジャン＝クリストフ』の読者ならば、「女友だち」のもっとも美しい数行のなかで、彼の弾くバッハを聴いたことの記憶がすぐさま蘇ってくるからである。パリ郊外にあるランジェー家の別荘の六月の庭で、オリヴィエとジャックリーヌとが愛のためらいのなかで彼らの未来の共同生活を決定しようとする瞬間、——「……空は灰いろで、光はなかば消えていた。幾つかの低い雲が重たげに動き、一塊りになって風に撥かれていった。この大きな、遠い風は、すこしも地上にはとどかなかった。木の葉一枚そよがなかった。ある大きな憂愁がすべてのものを、そして、彼ら二人の心を包んでいた。そして、庭の奥、半ば窓の開いている、彼らからはみえない館のほうから、オルガンの音がきこえていた。ヨハン＝セバスティアン・バッハのホ短調のフーガだった……」

クリストフにとって、バッハの音楽が彼の死の床にいたるまでの伴侶であったことを、ロランの暗示によって、のちに私たちは知ることになるだろう。——《われらにとどまり給え》(Bleib bei uns.)

そして、ロラン自身についていえば、1913年に、オランドルフ社から出版される予定の『ロマン・ロラン選文集』を、ロランの依頼で、彼の若い友人ルイ・ジレが編むことになったとき、ロランはこの友人につきのような助言を書き送っているのである——

「『ありし日の音楽家たち』では、私だったら、必要ならば、序文からの(音楽の重要性に関する)幾つかの断片に切りつめるでしょう。『今日の音楽家たち』には、おそらく、ベルリオーズとフーゴー・ヴォルフの肖像のある部分にとるべきも

のがあります。——この点についていえば、「広場の市」の、J=S・バッハの肖像（一ページ足らずですが）は選んでおく価値があると私は思います。」（1913年9月24日付）

彼はこの音楽家について、どのような肖像を描いているのであろうか。ジレ宛の短い数語によっても、この肖像にロランがひとかたならぬ愛着を抱いていることは充分にうかがわれる。それ故、私たちもまた、クリストフとともに、このバッハの肖像を内面のヴィジョンとして想い描いてみることにしよう、——

「彼〔クリストフ〕はヨハン＝セバスティアン・バッハの魂の《大洋》のとどろきを聴いていた。大旋風、吹きまくる風、逃れゆく生の雲——歓喜と苦悩とに酔っている諸民族と、寛容さにみちているキリスト、諸民族の遙か上方を翔っている《平和のお方》、——番兵の叫び声に目醒めさせられた街々が歓声をあげて、《天の花婿》のまえに殺到するとき、世界を揺るがすその足音、——思想と情熱と音楽形式と英雄的な生と、シェイクスピア風の幻影と、サヴォナローラ風の予言と、牧歌的、叙事詩的、黙示録的なヴィジョンとの驚嘆すべき貯えが、チューリングンの小柄なこの「教会オルガン奏者」のみすばらしい肉体には閉じ込められている。この男は二重顎で、小さな両眼が二重顎と吊り上がった眉との下にかがやいていた……——クリストフには彼の姿がまざまざとみえた！——陰鬱かと思えば陽気で、すこし滑稽なところがあり、頭にはゴチックやロココの寓意や象徴が詰め込まれていて、怒りっぽく、頑固で、しかも心が平静で、生への情熱と死への郷愁とを同時に抱いていた……」

さらにロランはクリストフの目を通して、バッハの生活や家庭、病気や困窮の輪郭を描き出したのちに、この肖像をつぎのような語句によって仕上げている、——「これらすべてを超えて、彼の音楽、彼の信仰、解脱と光、かすかに予見し、予感し、のぞみ、ついに把みとった《歓喜》、——《神》、彼の骨を焼きつくし、体毛を逆立て、彼の口から雷鳴をとどろかせる《神》の息吹……おお、《力》！《力》！《力》の至福の雷鳴！」

ロランはこのようにバッハの面影をとらえている。それは孤独のなかでクリスト

フが見てとったこの偉大な音楽家の姿でもあった。(バッハの肖像を描いているロランのペンのこの独特の躍動感と緊密感とは、あの『ベートーヴェンの生涯』の最後の数ページを私に思い出させる。——これらの箇処でロランの描き出す肖像には、可視の幾つかの筆触の背後にたえず不可視なものを感じられ、そのために私たちはこれらの字句を読みすすみながら、あたかもベートーヴェンやバッハの音楽そのものに聴き入っているかのような気分にとらえられる。)——そして、彼、クリストフが絶望の底であの《いとしい神よ、私はいつ死ぬのですか》という標題をもつカンタータの冒頭のコーラルを聴き、その音楽に心を揺られることになるのは、彼がこのバッハの面影を思い描いた日からほど遠からぬ時期のことであった。

(ここで、序でに言うておくならば、ジレが編集し、すでに解説をも書き了えていたこの『ロラン・ロラン選文集』は、まことに不幸なことに刊行されるにはいたらなかったのである。無比なものとも思われたこの両者の友情に、第一次世界大戦は容赦のない、悲劇的な深い亀裂を生じさせたからである。この亀裂が、このうえなく高く人間的と思われる一種の奇蹟によって癒されるまでに、その後27年の歳月が流れた。)

1890年3月9日から翌10日にかけてロランがローマから母親宛に書き送った手紙は、当時の彼にとってバッハの音楽がどのような意味をもつものであったかを理解する上で、きわめて興味深いもののように私には思われる。イタリア留学のこの時期はロランの生涯を通じてみても、モーツァルトとともにバッハが彼にとってもっとも親しいものとして感じられていた日々であった。——「私はいま、すっかりバッハのものです。彼の心の単純さ、信仰の実直さ、やさしい愛情、それに彼の男性的なメランコリーなどが、あらゆる方向から私に込み込んできます。親愛な音楽！親愛な音楽家たち！自分を愛してくれ、また自分が愛している孤独な人びとから遠く離れて、私は孤独です。——孤独ですが、かつて存在したもっとも偉大な心ともっとも高い精神とから親密な愛情を受けとっているのです。」(母親宛、1890年1月10-11日付)——それゆえに、彼がむなしい時間を費したかと思うときには——「私の友バッハに再会するために、できればとも帰りたいかったです。」

(1890年1月12 - 13日付)

ここで私は労を厭わず3月9 - 10日付書簡の一部を書き写してみたい、——

「午後、ミンゲッティ夫人のところへ、夫人のご自宅の集りに行きました。……私は自分のミサを唱えました。べつな言葉で言えば、数時間、バッハをやりました（註。私はいつもバッハをやっています。ミンゲッティ夫人がいつもバッハをご希望だからです。でも、夫人はつぎの日曜日に、グルックをも所望されました）。でも、今日、私はあまり満足しませんでした。私がおつばらマルヴィーダさんとミンゲッティ夫人とに縮約されるごく内輪の集りで音楽をやるということは了解済みだったので。彼女自身（ミンゲッティ夫人）、このまえはそれを請け合っていました。けれども、彼女は三、四人の婦人を招待せざるを得なかったのです。そして、いまや扉は開かれています。ところで、バッハはすこしも大衆のためにできていませんし、とりわけ、たとえローマの非常な貴婦人がたの集りであれ、群衆（*vulgum pecus*）のためにはまったくできていません。バッハの至高の瞑想に耳を傾けたあとで、いかにも手際よく演奏者に挨拶を言おうと想いつくような人びとを、どう考えたらいいのでしょうか。（序でに言うと、これまで私のよるこびの一つは、マイゼンブークさんのところでも、誰か他のローマの人のサロンでも、私が弾くときに、——誰も私にお世辞を言ったりしないということなのです。私が人をよるこばせていること、ときには非常によるこばせていることを、私は知っています。けれども、たとえばパリでだったら、声高に浴びせかけられるあの懐しみのないお世辞はけっしてないのです。ここでは（私がこれまでいたところでは）、それが洗練された心遣いの掟（私にたいしてだけでなく、みんなにたいして守られている）なのだと思ったのです）。——もう一つ、今日、私がうんざりしたのは、ミンゲッティ夫人が感激すると、たえず私の楽譜のほうへ身を傾けて、かなり凡庸にメロディーをうたうことです。彼女は一度なぞは一、二のコラールを（声を限りに、初見で）うたおうとして、そこにいる貴婦人がたを集めようとさえしました。ほとんど確信のない社交界のご婦人がたが、サロンでバッハをあんなふうには口ずさみ、わめくので、私はバッハのためにはずかしくなりました。今日からはもう止めます。もうバッハを他の人のところには持ってゆきません。自分のためと、それか

ら私たちが二人きりであるときのマイゼンブークさんのために、とっておきます。』

ミンゲッティ夫人の知的、芸術的な活気はロランの讃嘆の的であり、彼は夫人の日曜日ごとのサロンの雰囲気をおおいに愉しみもしたのであるが、しかし、バッハの音楽はロランにとってみれば、けっしてサロンの雰囲気に相応しいものではなかったのである。バッハにかぎらず、ロランの判断にしたがえば、真にすぐれた音楽というものは、つねに魂の奥深いところで交される対話としての性質をもつものであった。——孤独な魂と神的なものとのあいだに交される対話、創造的な魂とその語りかけに応じる者とのあいだに交される対話、また、創造的な魂を仲介者として二つの魂がひそかにとり交す対話。モーツァルトの《ロ短調のアダージョ》をめぐる、クリストフとオリヴィエとの相互の理解が、どれほど深いものであり得たかを私たちは憶えている。

このようなロランにとって、当時、彼の音楽のもっともすぐれた聴き手はマルヴィーダ・フォン・マイゼンブークであった。ロランがミンゲッティ夫人宅での日曜日のサロンで、居合せた数人のためにバッハを弾いて、その場の雰囲気に大きな失望を味わわれたのとは対照的に、彼はその前日、土曜日の夜に、マルヴィーダを訪れ、バッハを弾くことによって深いよろこびを経験している。

「……こうした会話のあとで、私はとても長い時間、音楽をやりました。バッハの受難曲一曲をほとんど弾いてしまったからです。奇妙なことですが、誰かバッハを理解し、愛している一人か二人のひとのために弾いていると、自分がすこしずつ深くバッハを感じとるようになります。そして、バッハがとてもうまく弾けて、自分の感性とスタイルとによく合った音楽なのだと思います。」（母親宛、1890年3月8—9日付）

マルヴィーダの回想録『一生涯の夕暮』にはこの時期のロランとの友情——そこにはほとんどいつでも音楽があった——についての記述が多く含まれているが、また、バッハについても彼女はしばしば言及している、——「すべての芸術のなかでももっとも表現に富むこの音楽という芸術が、また、厳しい数学的法則に支配されていることはまったく注目すべきことだ。バッハにおいては、この点がほんとうにすばらしい。溢れんばかりの創造力が示す神的な自由さに支配され、しかも厳格に

縛られているこの形式。ロランといっしょに読んだばかりの受難曲のレチタティーヴォは「バッハという」この思想家の悲劇的で、崇高で、感動的な頂点にあるものだ。しかも、彼はひきつづいて歌唱の部分で、この上なく気高い詩を表現しているのだから。」

そして、また、――

「バッハは宗教改革の理想的な、もっとも純粋な意味の表現だ。この厳格な形式の下で、実際、これは思想の自由、感情の表現、苦しみの崇高さ、この上なく高められた理想主義であり、しかも、つねに伝統的な信仰の枠のなかでの、深い宗教感情をもった人間なのだから。だからこそ、バッハは彼が描き出す苦しみや、そればかりか情熱の深さにもかかわらず、彼の音楽を受けとる者の心をこんなにも慰めてくれるのだ。彼の理想は確かなものであり、平和がどこに宿っているのかを知っているから。ベートーヴェンは反対に、たえず求め、たえず闘っているティツィアーノのようだ。理想というあの遠い、光りかがやくイマージュは当初は予感としてしか射しかけてきていないが、やがて、まことに超自然的な美となり、すべての疑いを遠ざけ、天上的な光で暗闇を照らすことになる。」

これらの文章を読むとき、すでに老齢の域にあるマルヴィーダと、ローマのフランス学院の若い留学生であるロマン・ロランとのあいだに交された言葉がどのようなものであったかを、私たちもまたそこに居合せて聞く思いがしないだろうか。

そして、二年間のイタリア滞在を了えてロランが帰国するとき、マルヴィーダはロランの「音楽的才能が彼女にもたらした深いよろこびへのお別れのために」つぎのような詩を書いた、――

さらにもまして貧しく、さらにもまして、

世界は私には貧しく思われました。

空虚と孤独、私のまわりにあるのはそれだけでした。

そして、いま一度、春がめぐってきて、

微笑とともに、野に花をもたらすとき、

友が、兄弟が、愛する血縁の者たちが去ってゆきました。

誰一人として戻ってくる者としてない遠い暗い国へ。

私の心は静かに諦め、さらにもまして黙しました、

彼らに続けとの呼び声がひびくのを待ちながら。

そのとき、さながら天上からの挨拶にも似て、

調和ある音楽が鳴りひびき、

私の魂をまことの故郷へ連れ去ってくれたのです。

音楽よ、おまえはいま一度、至高の、慰めにみちた言葉を語ってくれました。

私の苦しみはおまえの翼にのって、天空へと翔り、

そこで和められ、解き放たれて、神々の幸福と結び合いました。

瞑想に沈みながら、私はひたすらに聴きました、

想いを凝らし、ひざまずき、永遠なものの啓しの音を。

それらの音をひびかせたのは、友よ、それはあなたの手です。

ありがとう。それらの音が愉らぬ友情で私をあなたに結びつけてくれたのですから。

そして、私があなたと別れ、あの偉大な魂たちに出会うとき、

調和ある音楽につつまれたあなたの姿は遠くまで私についてきます。

ロランによって「何にもましてバッハを愛している、きわめて稀な婦人」（母親宛 1890年1月29－30日付）とよばれているマルヴィーダにとって、ロランの帰国はおそらく、彼女の晩年にめぐまれた思いがけない音楽的至福との別れを意味するものであったことは十分に想像されるところである。

私はこのローマの時期にとりわけ、バッハの音楽がロマン・ロランにとって親しい心の友であったと述べた。そして、ラテン的な光のなかに生み出された南方らしい愛と官能とを身に纏った芸術に心を魅了されながらも、ときとして、この若者が北方的なものに郷愁をおぼえることがあったのもまた事実である。——「私は移植されても無駄です。自分自身であるものから変わりようがありません。北方人なのです。ですから、ミケランジェロを唯一の例外とすれば、私が老ドイツ人バッハほどに親しく知り合ったイタリアの芸術家は一人もありません。……」（母親宛、

1890年6月9日付)——この文面に感じられるのは、イタリアの孤独のなかでのロランの、北方的なものへの郷愁である。そして、たしかに、北方的な精神を代表するものとしてのバッハの面影というものがある。それが理解されないわけではない。さきに引用したマルヴィーダの手記のなかでも、——「バッハは宗教改革の理想的な、もつとも純粋な意味の表現だ」という言い回しがみられる。

しかし、マルヴィーダの場合にも同じであろうが、ロランがバッハの音楽の裏に愛するもの、それはおそらくこの音楽家の「北方的」特徴のなかに閉じ込め得るような性質のものではあるまい。それはこの音楽家の「北方的な」個性を超えた何かであると言わねばならない。

パリの高等師範大学在学中に、ヴァーグナーとバッハとを同じコンサートで聴き、——「ヴァーグナー派はこのような〔バッハの〕軽い、単純なアリアを称讃することは自分たちにはできないと思っている。反ヴァーグナー派はバッハのアリアに喝采を送ることで、ヴァーグナーにたいする軽蔑を明確にできると信じている。シュアレスと私とは、バッハとヴァーグナーに喝采を送る」(1887年3月20日)と書いているロラン、また、ベートーヴェンの《二長調ミサ曲》を聴き、そのなかの《ドンナ・ノビス・パケム》〔アニウス・ディ〕について、——「このミサ曲全体のなかで、これはもつともキリスト教的な部分である。これはJ=S・バッハとヴァーグナーの《パルシファル》のみが表現し得たあの平和なよろこび、おだやかに焼え立つあの炎をかがやかせている」(1889年3月3日)と誌しているロラン、そして、さらには、セザール・フランクの演奏を聴きに出かけて、——「フランクの演奏は彼の作曲する音楽以上にニュアンスに富んでいる。彼の音楽にみられる生硬さ、唐突さはここにはない。——彼が演奏するのは幾つかのフランクとJ=S・バッハの一曲だけである。バッハでは《ホ短調のプレリュードとフーガ》、これは節度があり、単純で、力強い」(1889年5月27日)と日記で語っているロラン、——これらのロランの姿には、すでに彼が音楽のなかに求めているものがはっきりとうかがわれるように思う。

宗教的であるもの、あるいは彼にとって宗教に代り得るもの、——バッハの音楽に関してもその例外ではない。

そして、それ故に、彼がバッハをもっとも身近に感じるのも、あの大都会の孤独のなかでの《死》の淵にたたずむクリストフと同じように、彼自身の孤独のなかである。すでに検討した1890年3月9日—10日付の母親宛書簡も、そのことを語ってはいしなかっただろうか。そして、1918年1月の日記は、彼が流滴の地スイスの、レマン湖畔ヴィルヌーヴにあるオテル・ピロンに母とともに投宿しているとき、他の客たちとほとんど言葉を交すことなく、毎日のようにベートーヴェンのミサ曲、及びソナタ、それにバッハのフーガをピアノで研究して夜の時間を過しているロランの姿を私たちに伝えてくれている。戦乱の嵐が吹き荒れ誹謗と中傷とが彼自身にむかって際限なく投げつけられているとき、孤独な、神聖な時間に、彼はそれらの音楽と何を語らったであろうか。

マルヴィーダとともに、ロランにとっていま一人のかけがえのない女友だちであったルイズ・クリュッピは、その生涯に幾度かの不幸に見舞われながらも、気高い心情を失うことのなかった女性であるが、彼女が突然の病気によって愛する子どもを喪った1909年春以降の数年間に、ロランがクリュッピ夫人に宛てた手紙の数かずは、ロランの宗教感情を知る上でもっとも貴重な資料の一つである（私はクリュッピ夫人宛書簡が「カイエ・ロマン・ロラン」の一冊として刊行される日を、最大限の期待をもって待ちのぞんでいる）。それらの一通で、ロランはクリュッピ夫人につきのように書き送っている、—

「私たちの衷には、私たちを超えた一つの力があることを感じ、その力をまえにすると、敬虔にならざるを得ないように思われます。毎朝、その力が私たちとともにとどまるようにと祈らねばなりません。《われらにとどまり 給え》(Bleib bei uns.) J=S・バッハのあのすばらしいカンタータをご存じですか。私は感動なしにあの最初の数小節を想いうかべることができません。そこには、レンブラントを想わせるやさしさと悲しみと夕闇との雰囲気があります。」（1911年7月8日付）

ロランが音楽の衷に感じとっている宗教的なものの表明として、これほどに端的に語られているものに触れても、なお説得されずに済みますということがあり得るのだろうか。

「そこには……やさしさと悲しみと夕闇との雰囲気があります。」— 長い旅路

の涯で、クリストフが自分の全生涯をふり返るとき、彼自身がその肉体から離れてゆこうとするとき、そして、彼にとって親愛な、神聖な音楽でさえもが忘却のなかに消え去ってゆくものであると思われたそのとき、彼は自分の思い遣いに気がつき、もう一度、音楽にむかってこう語りかけた、――

「おお、古い道づれよ、私の音楽よ、おんみは私よりもすくれている。おんみを追い払おうとするなんて、私は思知らずだ。でも、おんみは、おんみはすこしも私から離れたりはしない。私の気紛れに嫌気を起こすこともない。赦しておくれ！これが気紛れだということを、おんみはよく知っているね。私はけっしておんみを裏切りはしなかった。おんみはけっして私を裏切りはしなかった。われわれはたがいに信じ合っている。また一緒に出発しよう。友よ。私とともにとどまり給え、最後まで！」

そして、ロランはクリストフのこの言葉のあとに、楽譜の一節を置いている、バッハのカンタータ《われらにとどまり給え》(Bleib bei uns. BWV. 6) からの一節を。



グ・ト・ヌーグのくもりの木

マルヴィーダとロランの往復書簡（補2）

I マルヴィーダからロランへ

フィレンツェにて
1890年6月24日

したしい友、「お休み！」のあいさつを手紙でしかお送りできなくなりました。残念なことに答えはありません。けれども、せめて今晚だけはこの大事な習慣を止めたくありません。それで二言、三言あなたに書こうと思います。一日中あなたのことを考えていました。当地ではまるであなたのところへ来たような心地がします。私にとってあなたはそれほど深くフィレンツェと結びついているのです。あいにく今日は聖ヨハネ〔洗礼者ヨハネ〕の祝日で、どこも閉まっていました。そうでなければ美術館を訪れる時間がたっぷりあったでしょうに。サンタ・マリア・ノヴェラ教会、スペイン礼拝堂、それにサン・ロレンツォ教会だけを見ましたが、〔その〕メディチ家の廟は駄目でした。

これから馬車で美しい丘陵を走ってみたいと思います。当地はローマよりも暑いです。私はフィレンツェが好きなのですが、それでもやはりローマのほうが私の心には合うことが分かります。カンパーニャ〔ローマの平原〕がなつかしいです。ーヴィラ・マッテイが、ベートーヴェンとバッハが、そして私のためにそれらを弾いてくれた人が。とても美しく崇高でした。あれ以上つづくのには理想的にすぎました。だから又、二度とは戻って来ないでしょう。昨晚このことを感じました。私には分かります。この私の全生涯がそうだったのです。——つまり断片的だったのです。それは永遠なものにたいする私の魂の感受力をたかめるためなのかも知れません。ともかく素晴らしいでした。聴く者は幸福をおぼえ、慰めをえました。この思い出は私にとって口では言いつくせぬほど貴重です。

ご機嫌よう、したしい友、あなたを祝福し、愛します。

あなたの友

Ⅱ ロランからマルヴィエーダへ

ローマにて

1890年6月25日、水曜日

　　したい友、やはり本当なのです——あなたはもうローマにはいらっしやらないのです！お手紙の消印がこのことを明白に語っています。そして今はもうフィレンツェにもいらっしやらないのです。この瞬間にも更に私から離れて行かれます。あなたの滞在なさる土地を知りませんので、私の思いがあなたを追いかけるのは骨が折れます。幸いあなたの存在がまだまだ生き生きしていますので、ローマが私にとってどんなに空虚になったか感じないですみます。ラシーヌの『ペレニス』の一句、「この東方が私にはいかばかり不毛と倦怠の地になったことか！」¹⁾を思い出して下さい。

　　この私もいわば荒野に住むことになります。なぜとって、私の愛する一切のものが去ってしまいました。一切が——残っているのは不滅の自然と、そこから生まれ出た芸術と、そして私たちが内に宿している神だけです。これらは私たちに孤独を忘れさせはしませんが、孤独からその棘^{とげ}を抜いてくれます。ですから私は昨日、1時間ばかりモーゼを見てすごしました。（それとも、私がそうしたのは、鎧戸の閉まったあなたの窓を通りすがりに一瞥するためだったでしょうか？）私はこの神々しい予言者の許で少しばかり怒りを手に入れようと思ったのですが、得られたのは、じつと堪^こえた重苦しい悲哀だけでした。この大理石は生きています。魂がその中にまどろんでいます。といいますのは、ふたりの型通りの、騒々しい見物人によって深い瞑想を妨げられるや否や、その顔には、私がある時まで求めて得られなかった、さげすむような憤怒の表情が現われたのです。そして煩わしい訪問客がやっと立ち去ると、彼はまたその重々しい憂愁に沈みました。今日はソポクレス²⁾（ソフォクレス）が明るい平安を少しばかり恵んでくれる筈です。

　　ああ、したい友、なぜあなたは、ふたりで過ごした時が二度とは戻らない、と

おっしゃるのですか？ なぜですか？ 実は私もそう思い、そのことを恐れるのです。この1年というもの、この感情が私につきまといました。私は言いつづけました——これは夢だ、夢にすぎないのだ、と。そしてこの夢が逃げてゆくを見ないために、私は過去にたいし、未来にたいし目を閉じ、この快い夢の中にだけ生きました。そして今、この夢は飛び去ったのです。もう二度とは戻って来ないのでしょ
うか？ しかし夢をみたというのは楽しく——そして悲しい³⁾ことです。(——)

私たちの楽譜の束が送り返されて来ました。二長調のミサ³⁾はまたローマへ帰って
から取り出しましょう。しかし昨日は「告别」ソナタを弾き、そのなかに私自身の
気持が映っているのを見ました。

さようなら、したいい友。°どうかお元気でお仕合わせに！ 心からあなたを愛します。

R. ロラン

訳注

1) 『ベレニス』(1670)はローマのティトゥス帝(79-81)とパレスチナ
女王ベレニスの悲恋を題材にする。引用の一句に相当するものは、かねてベレ
ニス¹⁾を熱愛するコンマゲネー(シリア北東部)の王アンティオクスが、ティ
トゥス帝と共に彼女がローマへ去ったあとの心境を述べた科白にみられる(1
幕4場)。

2) ラテラン美術館にある胸像のこと(原注による)。

3) ペートーヴェンの「ミサ・ソレムニス」のこと。

Ⅲ マルヴィーダからロランへ

ミュンヘンにて

1890年6月26日、木曜日の夕

したいい友、ご覧のとおり私は、夕べと一緒にすごすという私たちの以前からの
大事な習慣をできるだけ守ろうとします。ブレンナーの峠でさえ感じられた大変な
暑気にぐったりになりましたが、急行列車で5時に到着。レーンバッハ¹⁾家の召使いが馬車

で出迎えてくれましたので、難なく邸に着きました。そしてまるでイタリアへ来たのではないかと思いました。それはどイタリアのような心地がするのです。ヘルビヒのヴィラ・ランデ²⁾に似ています。ただこれよりはるかに美しいです。周囲はさらに堂々としています。前庭(アテネ様式の)がすぐ近くにありますが。したい友とその愛らしい妻は人を魅する暖かきで迎えてくれました。この暖かきは彼らに——とくにレーンバッハ自身に特有のものであります。素晴らしい邸の案内がすむと、とっぜん彼はオルガンに着席して演奏しました——以前よくパラッツォ・ボルゲーゼでしたように。彼には音楽の素養はまったくありません。しかしオルガンの扱い方を習得しました。そしてわずかの和音でもって感情の多様な世界をゆたかに表現するには感動させられます。それは私には二重の感動でした——つまり、私にとってあれほど大事であり、今それを失ったため言うに言われぬ悲しみを味わっている、私たちの夕べのことが心にあつたのです。今日はずっと、これらの夕べを恵んでくれた大切な友のことを考えていました。そして私は感じたのです——「郷愁」が日、一日とつり、ほかに友情といわれるものはどれも私にこのことを忘れさせてくれないのを。どうかこの地であなたの便りを受け取りたいものです。この邸の人びとは私をそれほど早く出発させはしないでしょうから。

あなたの友

金曜日の朝

昨晩はもう手紙を出すことができませんでした。それで今朝のうちにもう数行書き足します。昨日はまったくイタリアふうの一日でした。夕食は趣きのあるアーケードの下のテラスで。電燈が14世紀の素晴らしい噴水のある庭園を明るく照らしました。この噴水はヴィラ・バルベリーニのそれにもまして見事です。——今朝は曇天で雨です！南方の純粋な芸術的よろこびをこのような冷酷な風土に移植して何になるというのです！友よ、あなたもこの苦々しい幻滅を味わうことでしょう。どうしてギリシアの芸術はギリシアの恵みゆたかな空の下にのみ成長し、一方、現世の美を放棄し、ひたすら内面を志向するゴシックは北方にのみ成立したのでしょ

うか？北方が生み出した倫理的な力、英雄的な偉大さを私が見損っている、とは考えないで下さい。しかしこれらの英雄的な魂のなかにはすべて癒しがたい欲求——いわば生涯の傷がのこりました。この傷を治しえたのは南方の調和だけです。この調和は、すべての深い魂がおぼろげな予感として宿している、理想的な美の象徴のような働きをするのです。（———）

いつ出発なさるのか知らせて下さい。あなたのことを思い、あなたを愛します。

訳 注

- 1) Franz von Lenbach (1836-1904) 19世紀後半のドイツのもっとも高名な肖像画家。彼はマルヴィーダも描いた。
- 2) 原注によればローマにあるヴィラ。したがって、ローマ北東の古都ヴィテルボー在の有名なヴィラ・ランテとは別物——おそらくその模倣であろう。ヘルビヒ(Helbig)はドイツ名であり、マルヴィーダの友人と思われる。

Ⅳ ロランからマルヴィーダへ

ローマにて

1890年6月27日、金曜日の夕

したい友 私は息がつまることがあります。——肉体的にも精神的にも。それはローマが暑いばかりでなく、ローマが時として私には荒涼と見えるからです。しかし心身に悩みがない限り、私は戦うことができます。本を読み、ベートーヴェンのハ長調のほうのミサを弾きます。ふたたび書くことを始めました。こんな時には、いつでも私の魂は平安です。私はソポクレスを見ました。どんな意図からかは、すでにお知らせしたとおりです。ソポクレスは期待どおりの効果を及ぼしてくれました。私はすっかり晴朗な光に浸されたのです。解放された、清澄な彼の魂が感じられます。私の魂はまだそうではありません。ですから彼〔の胸像〕は他の傑作ほど親しめません。しかし私は限りなく彼〔の胸像〕を賛嘆します。（同じような気持を彼の悲劇作品は私に起こさせます。これはすでに何度もお話したとおりです。）

（———） 私の心はあなたがお示し下さったすべてのご好意にたいする感謝

でいっぱいです。パリを出発した際、私を待っている完全な孤独のことを思うと、不安はなくても、心は悲しみに満ちていました。というのは、私はもっと閉鎖的な人間になって帰国するものと固く信じていたからです。しかし私はそれとは反対に、明るい澄んだ魂をいただいて戻ります。これは誰のおかげでしょうか？ それは、私にあれほど強く訴えてきた、この自然の異教的な優美さと、それに、高い目標をめざす努力と下劣なものにたいする軽蔑において私を力づけてくれた、一つの気高い心のやさしい影響のおかげです。互いにいただく友情の素晴らしい魅力のことは申しません。そしてあなたが少々ご自分を非難なさったあのことにたいしてさえ、私はそれだけいっそう感謝します。なぜとって、たとえあのことで私が苦しんだにしても、私にとってこの苦しみに耐えることは、友情の欠如（これはそれまで私を苦しめました）よりは喜ばしかったのです。（―――）

さようなら、したい友！ くれぐれもお大切に。心からあなたを愛します。

R. ロラン

訳 注

- 1) 文意が明らかでないが、おそらく青年ロランの不幸な恋についてマルヴィーダのとった態度をさすのであろう。先立つ1890年5月28日付けのマルヴィーダの書簡（「ユニテ」2号）——とくに結びの一節など参照。

V ロランからマルヴィーダへ

ローマにて

1890年6月29日、日曜日の夕

したい友 あなたの好意は私にとってどれほど有難く、どれほど役立つことでしよう！ あなたへの私の好意が同様に価値あるものでありますように！（まことに僭越な言い方ですが）。

（―――） この8ヶ月いらいの慣れない生活のため私は少しばかり疲れており、自分の家をなつかしく思います。ホテル暮らしは嫌いです。どこで休暇を送る

にしても、一つだけ確かなこととして、私は散歩をしようとは思いません。私は多くのものを見てすっかり疲れます——芸術品やその他のものの印象ですっかり疲れます。これらの印象をそっとしておきたいのです。いちばん望ましいのは1ヶ月寝て、1ヶ月書くことでしょう。私のいまの感じでは、ひっきりなしに仕事をすることは不可能です。神経が衰弱しています。動作は断続的です。それからあお向けに倒れ、また起き上がります。そしてまた倒れ伏すのです。これは生活とは言えません！ ああ、ただの1ヶ月でも美術も自然も音楽もなく、美術館もなく、思考しなくてよいなら！——ええ、これが私の願うものです！ しかしその機会が与えられたとしても、私はもはやそれを受け入れることができないでしょう。あなたがそのイタリア風の——それともアッティカ〔アテネ〕風の（そのどちらですか？）小世界で芸術の新しい楽しみに接しられたことを大変うれしく思います——それが親愛なデューラーとバッハの国に建てられた、ほんのささやかなプラトンのイタリアにすぎないにせよ。——いいえ、私は北方への帰還に際して苦々しい幻滅を味わうことはないでしょう。といますのも、北方が私から去ったことは一度もないからです。私は北方をこの心のなかに宿しています。愛する北方！ 私の幼年時代にまでさかのぼる、すべての苦しみ、すべての内的な悩みはそのおかげです。それなのにあなたは、私がそれを何物にもまして愛することのないよう望まれるのです。私たちにとって悩みは喜びより千倍も大切なのではないのでしょうか？（――）

昨日私は、トルストイの小説『クロイツェル・ソナタ』についての、友人シュアレスの判断がいかに正しいかを確認しました。彼はこう書いて寄こしたのです——「見事だ。それでいて不快だ。禁欲を教える15世紀の天才的な説教師を聞く思いがする。」私はこの小説を学友のひとりギローに貸しました。彼は私が知っているもっとも厳格なカトリック信者のひとりです。少なくとも中世初期の人間に数えられます。）私からの本ということで、彼は不信の念をもって受け取りました。いまは夢中になっています。私はちがいます。この芸術家には賛嘆を惜しみません。しかし人間のほうは好きではありません。そして愛の対象ではなく賛嘆だけの対象になる人びと——このような人びとが私にとって大した価値のないことは、したい友十でにご承知のとおりです。人生におけるのと同様、芸術においても私の愛はた

だ友人だけに限られます。しかし贅嘆については私はごく寛大です。そしてこの世界は[贅嘆の対象になる]いとも見事な作品で溢れています。

さようなら、したい友、心からあなたを愛します。

R. ロラン

Ⅱ ロランからマルヴィーダへ

ローマにて

1890年7月2日、水曜日の夕

私のしたい友、来週の今日は私はもうローマにはいないでしょう。月曜日が火曜日に出発します。（―――）

ヴィラ・アルバーニを訪れないままでローマを去りたくはありませんでした。あそこで、あなたの素敵なオルペウス（オルフェウス）の浮彫りを見ました。妻エウリュディケの憂いに満ちた、繊細な憧れは心を打ちます。しかし告白しないわけにゆきませんが、ヴィラ・ルドヴィーシの群像¹⁾と同様、ここでも私はこの種の作品が与えてくれる楽しみに抵抗しようとします。主なる理由は、それらの作品が私の精神状態にあまりにもよく合致し、私の心のなかにあまりにも強い反響を見出すからです。私はたえず自分の性向と戦います——全き真理にはふさわしくないと思える私自身の性向と。ですから私はモーツァルトがすべての音楽家のうちで最大の者でないことを喜んで認めます。それでいて私は彼をどの音楽家よりも好みます。ラシーヌも同じです。これらの優美なギリシア彫刻から発する繊細なものが正しく私を魅了します。そして再びわれに帰ったとき、私はこれらの作品が心のなかに呼びさます喜びにたいし抵抗するのです。このような瞬間には、私はこれらの作品のなかに何か柔弱なもの、わざとらしいもの、そして或る程度甘ったるいものを見るような気がします。私にとっては騎馬戦の見事な断片（同じヴィラの）のような作品のほうが——或は、まったく単純に、この優雅でしかも力強いローマの地勢のただ中に連なる、遙かかあなたのサビーナの壮大な山並みをヴィラ・アルバーニから見晴らした時の自然の印象のほうがずっと親しみがあります。繊細さが力によって支えられ

ない場合、芸術ではベルギー²⁾のような傾向が優勢になる恐れがあります。そして生のほうは植物にも似て、仕合わせな無為に流れる危険があります。花であることはまったく結構です。しかし人間であることはそれ以上なのではないでしょうか。

昨日は一氏のところで夕食に招待されました。立派な人たちです。しかし私は機知を弄する人びとや利口ぶる人びと、いや(金曜日の晩のような)滑稽な人びとや少々コミカルな人びとと同席するほうが、実直な凡人たちと一緒にいるより有難いという気持ちになりました。(これは大きな声では言えません!)愛することもできず、興ずることもできない時、私はほんとうに不幸です。

さようなら、したい友!できることならオーバーアンマーガウの受難劇³⁾をご覧になるとよいです。もしイタリアへ戻る途中、この国にかんする私の知識をもう少しふやすという義務、そして一方、フランス[イタリア以外の国?]にはあまり長く滞在しないという義務がなければ、私もきっとオーバーアンマーガウに行くのです。(母が自分のほうから提案してきました。)先週は来る日も来る日も頭のなかで私たちの素晴らしい散歩と晩のおしゃべりの時間をくり返し味わいました。

心からあなたの友

ロマン・ロラン

訳注

- 1) 原注によれば(アガメムノン王の遺児)エレクトラとオレステースの姉弟の群像。
- 2) Perusino (ca. 1450-1524)本名はピエトロ・ヴァンヌッチ。フィレンツェ、ローマで制作し、晩年はウンブリア地方の首都ペルージアで活動。(ペルージノの名はこれに由来。)15世紀のウンブリア派(後出の書簡Ⅷ参照)を代表し、ラファエロの師としても知られる。
- 3) 南バイエルンの小村オーバーアンマーガウで10年毎に村人たちが演じる壮大なキリスト受難劇。すでに350年ちかくの伝統をもつ、文化史的にも重要な行事。

Ⅶ マルヴィーダからロランへ

ミュンヘンにて

1890年7月3日

したい友、相変らずここにおります。友人たちと悪天候が私を引きとめています。雨また雨です。それでも明後日、土曜日には出発しなければなりません。まる1日の行程で、土曜日の夕方にはエムスに到着できると思います。あなたの出発に先立ってバリの住所をエムスに送って下さい。通りの名前はおぼえています。番地のほうは——。覚悟していますが、バリではお互い多くは得られないでしょう。あなたはまず田舎へ行き、そしてもしスイスへも旅されるなら山々があなたを虜にして、もはや離さないでしょうから。さわやかな高地の空気の中での完全な休息は、もしかすると今のあなたには最上かも知れません。ゆっくり1ヶ月休息したい、とあなたが願うのは、もっともだと思います。どこへ行かれるにせよ、ぜひとも、あなたの感情生活を切り離すことをしばらくやってみなくてはなりません。——少なくとも可能なかぎり。というのは、あなたが感情生活からすっかり解放されることはあり得ませんから。どうか植物のような生活を少しやってみて下さい。あなたの仕事にきつと役立つでしょう。

あなたから北方にたいする愛を——北方が生み出した力強いもの、崇高なものにたいする愛を奪うことは、私は考えてもみません。しかし昨日、デューラーの銅版画の見事なコレクションを見たとき、またしても私は北方がもつ痛ましい偉大さを感じました。この想像力、この底知れぬ思想、写実的なものにおけるこの理念性！しかしまた何と多くの深い悲哀、何と多くの厳しいメランコリー（「メランコリー」と名付けられた銅版画ばかりでなく）、形式の美にたいする何と多くの、満たされえない憧憬！私はこのコレクションを所有したいです。それは素晴らしいもので、そこから多くを学ぶことができます。

午前は毎日そうですが、いま2時間ほどアトリエですごして来たところです。今日はレーンバッハと二人きりでした。これはいつも本当に楽しいことです。彼の絵筆の下で驚くばかりの表情にとんだ新しいビスマルクが誕生しました。私とレーンバッハは、彼のよく知っているこの人物について話し合いました。そしてよく似

た、それでいて非常にちがった二つの性格としてガリヴァルディについても。このような体験のあとでは、エムスでの滞在はまったく味気のない、単調なものになるでしょう。しかし私たちが心をこめて払う犠牲は、私たちの魂を光と熱でもって満たしてくれます。¹⁾ご機嫌よう、したい友、あなたの旅を楽しんで下さい。あなたを深く愛します。

M. マイゼンブーク

訳 注

- 1) その頃マルヴィーダは、エムスにいる病気の姉を見舞うため、毎年この地で数週間を過ごすことにしていた(原注による)。

VIII ロランからマルヴィーダへ

ローマにて

1890年7月4日、金曜日の夕

したい友、上々の天気。青々した空。わざとこのことを書きます——あなたがローマをもっと懐しがられるように、と。(そしてそれによって私のことをも考えて下さるように、と。それというのも、だんだん私のことをお忘れになるかも知れませんから)。

昨晩は別れを告げるためもう一度ジャニコロの丘を越えてみました。——そして今朝は「バルナス」¹⁾と「アテネの学堂」²⁾にも「さようなら!」を言いました。そして今、天幕をたたむ仕事³⁾にかかり、出発まではもう何も見たくありません。——空、ただ空のほかには。この空は旅する私にもうしばらく従ってくれるでしょう。私はイタリアをそう急いで去るつもりはありませんから。1週間のうちにはアンコーナに、そして2週間のうちにはパルマに着かなくてはなりません。少なくともこれが私のプランです。しかしこれも私の自由を侵してはなりません。そうでないなら、私はあっさりこのプランを捨てます。

最近また書くことを始めました。そしてまんざら不満でもありません。ただ、あ

まりにもウンブリアの画家たちを連想させる一種の「柔弱な」単調さが気になります。私はこれと戦うのですが成功しません。それというのも、この単調さは私の思考をやさしく眠らせてしまうからです。自分の緊張力を、さらには幾分かの苛酷さを取りもどすために、まる2ヶ月の北方の雨、寒気、風を私は期待します。（どうか私の奇妙な願いを笑って下さい。大まじめというわけではありませんが、この考えは私を少しばかり喜ばせてくれます。）時折、いくつかは思いどおり私を改造してしまうかも知れない、この地の気候のやさしい専制ぶりに反抗したくなります。ちようど両親はスイスカブルターニュに3週間の滞在を考えています。ああ、この私は永遠に旅をする運命なのでしょうか？ 私には全然その気はありません。もともと私は旅をするどんな機会も逃しません。そしていつも深い印象を受けます。しかしできるものなら、どこか美しい土地を選んで、そこで多くの自然と少しの芸術を味わいながら、夢うつつに時をすごしたいです。これはいつかやってみます——私になお欠けている僅かのもの、つまりドイツ、イギリス、スペイン、ギリシア……等々、インド、日本、アメリカ……そして火星をみたのちに！

さようなら、したい友。お返事をいただけますなら、今回はアンコーナ宛てに、次回はボローニャ宛てにお書き下さい。心をこめてあなたを愛します。

あなたの友

R. ロラン

ヴィラ・アルバーニで摘んだ小さな花を同封します。私の記憶では、あなたはこの色が好きでした。

訳注

- 1) 2) いずれもヴァチカン宮にあるラファエロの名画。
- 3) 物事の終結をあらわす慣用句。

IX ロランからマルヴィーダへ

ローマにて

1890 7月7日、月曜日の朝

したい友、ローマを去らねばならない瞬間が私にもやって来ました。そして今はいじめて私は、他の人びとがこの都市^{まち}を見たときに味わうような気のする、あの憂愁の感を知ることになります。それは愛する人間との別離の際のような、現実の苦痛ではありません。それは一種の静かな悲哀です——悲劇の本質を規定するとラシーヌのいう、あの「品位ある悲哀」に似ています。

この9ヶ月というものを目を開けたまま夢みていた、詩の世界^{ポエジー}に私は別れを告げるでしょう。夢は果ててはいません。もし夢がなければ私は生きてゆけないでしょう。しかしそれを見つづけるには、私は外なる目を閉じて、ただ内面を見さえすればよいのです。そのような時には音楽はうるわしい隠れ場です。いま私もまた、理想が具現化した国から散文と現実の国へ移ります。私は現実をよく愛します。しかしローマに来ていらい、私は現実を忘れることを学びました。数日のうちにこの幻影はやくも消え失せているでしょう。詩的な気分は曇り、土色の空からは弱々しい光が射すだけです。幸いなことに北方の魂からはより豊かな生命が流れ出ます。外なる太陽が消えるのは、私たちの内部で燃えさかるためです。「魂なしで」生きることは、光に乏しい北方では南方の空の下でよりも困難だとお考えになりませんか？ 南方では自然の内部から魂が私たちに語りかけるのですから。

さようなら、したい友、心をこめてあなたを愛します。

R. ロラン

デューラーの作品の印象についておっしゃることで、ミラノでの私自身の印象がよみがえります。私は2日間しかいませんでしたが、その半日をこれらの深遠な銅版画に捧げたのです。

ローマからモーゼの大きな写真を1枚もって行きます。この崇高な顔が私に与える強烈な印象のことは云々しませんが、この顔を見ますと、私はいつも少しばかりあなたの近くに置かれた気がします——サン・ピエトロ・イン・ヴィンコリー教会

はヴィア・デルラ・ボルヴェリエラからそう遠くないのですから！

訳 注

- 1) 当時マルヴィーダの住居のあった通り。ミケランジェロのモーゼ像のあるサン・ビエトロ・イン・ヴィンコリー教会に近い。

X マルヴィーダからロランへ

エムス(ナッサウ、ホテル「ロンドン市」にて

1890年7月8日

　　したい友、昨晚やっと当地に着きました——あまり快適でもない14時間の旅ののちに。レーンバッハ夫妻は私を引きとめる新しい理由を次々に探しました。そしてとうとう私が「出発しなければならない」ことを言明すると、ほとんど感情を傷つけられたようでした。別れる際、レーンバッハは私にたいし、この邸を自分のものように考えてほしい、と言いました。しかしこの気候では!!! 少なくとも昨日は——冬仕度が必要でしたが——まだ我慢できました。3、4回ちよつとした俄か雨があっただけで、夕方、ライン河沿いの旅にはメランコリックな美しさもありました。しかし当地へ着いてみると、私の部屋には湿った寒気が漂っているのです！それでも私をさっそく暖めてくれたのは、私を待っていた9通の手紙のなかにあなたからの2通があったことです。したい友、ほんとうに有難う！ 私が——あなたを忘れるですって？ いいえ、こころから愛している時には私は忠実です。ただあなたのほうで私に友情を守って下さることです！あなたが親しい国とその青空をまだ楽しめることをあなたのために喜びます。そのやさしい影響力に逆うことはお止めなさい。このおだやかな空の下で多くの力強い人間が成長しなかつたでしょうか。戦いに生まれついた北方の子たちにとってこそ、この調和は有益な[〜]のです。デューラーの峻厳な偉大さが私にこのことをあらためて証明してくれました。そしてまだあなたは若いのです。戦いはかならずやって来るでしょう。人生は高貴な魂をもって前進する者には戦いを免除しはしません。ですから、南方があなたに恵んでく

れる調和的な印象の貯えをつくっておきなさい。私はもう戦うことに疲れしました。もう十分です。それで私は、私の最初にして最後の愛の対象である、慈悲ぶかい母なる自然の両腕の中へ喜んで逃れてゆきます。灰色の空、永遠の雨、そして人びとが生気をとり戻すはずの真夏に襲うこの寒気は、はやまた私を深い憂愁で満たします。私も眠りたいです。しかしあなたのように、過剰な印象から心身を休め、ふたたび仕事にかかるためにではなく、永遠のふところに抱かれてまどろむためにです。またしても私の健康は北方の影響を受けてひどく悪いです。

あまりにも多くの「繊細さ」にたいするあなたの不安を私は笑わずにはおれません。心配は無用です。あなたには少しばかり反抗の精神が宿っていて、「繊細さ」におけるあまりに著しい進歩を許そうとはしないのです。しかし私は、すでにアッピア街道と一緒に散歩した時に気づいた、このかすかな反抗の傾向がとても好きです。エレクトラとエウリュディケの魅力に抵抗¹⁾するのは、あなたは自分のなかにモーゼを十分もっています。

2)
ポローニャではフランチアとコスタの聖チュチーリア礼拝堂を忘れずに見て下さい。私は大好きです。この手紙はポローニャに送ります。どうかうまく受け取って下さるように。

深い愛情をこめて

M. M.

訳 注

- 1) 前出の群像エレクトラとオレステース、オルペウスとエウリュディケのこと。
- 2) この礼拝堂にはロレンツォ・コスタとその弟子フランチェスコ・フランチアによる、この聖人の生涯を描いた優美なフレスコ壁画がみられる。初期ポローニャ派のもっとも重要な作品(1506)。

《訳者あとがき》

「ユニテ」の11号(1980)までに掲載したロラン＝マルヴィーダの往復書簡の抄訳をさらに補足するため、前13号に引きつづいて、1890年6月24日から7月8日までの10通を訳出した。「ユニテ」2号(1974)の6通に続くもので、マルヴィーダはヴェルサイユに住む養女オルガ・モノー＝ヘルツェンを訪問するため、またロランは夏休みを故国で過ごすため、相ついでローマを発ち、フランスへ向かった時期にあたる。「ユニテ」3号(1975)に掲載の分につなぐには、さらに11通を訳出する必要があるが、これは次の機会にゆずりたい。『ロラン＝マルヴィーダの往復書簡(1890-91)』を通読していただく読者には、ご不便をかける点、お許しを願いたい。

南大路 振 一

雄 飛 する 魂

ジャン・ゲーノ

ひとたび彼〔ロラン〕のじつに容赦なく明るい眼が自分の上におかれるのを感じたとき、その人は、永久に、自分自身の義務とするものについて別の考えをもった、とわたしは思います。彼のそばではすぐさま、人生のある種の偉大さは可能だという気がしたものです。彼は人びとに、だれしもそれが出来ると信じさせるのでした。彼がそれぞれの人に声をかけるとき、もっともつましい人にたいしてさえも、必ずその人をその最高の水準に位置せしめ、その人に異常な希望を吹き込もうとするようでした。《魂のエネルギー》には感染的な何かがあるのです。(ロラン生誕百年祭記念講演において)

『精神の独立』(山口三夫訳/みすず書房刊)から
ロマン・ロラン全集第Ⅲ期第41巻

ユニテの広場

中村さんのこと

大橋 哲夫

ロマン・ロラン研究所の評議員でもあり、ロマン・ロラン友の会のことをなにくれとなくお世話していただいていた古い会員である中村佐多子さんが、今年6月突然なくなられた。もともと心臓が悪くて、しばらくセミナーの会合にも遠ざかっておられたのが、5月の会合に元気な姿を見せられ、これからは毎月出席できそうですとうれしそうに言っておられただけに、私は最初耳を疑った。きくと、5月の月末には日仏協会の集いにも出席され、さらに花をもって宮本先生を日赤にお見舞いにかれたとのことであったが、なにか自分の死を予感して親しい人たちに別れを告げにまわれ、ひっそりとなくなっていかれたような気がする。中村さんは日頃、水彩画をかき、詩を書いておられて、それを詩画集のような形で自費出版する予定をしていて校正の段階であったという。クリスチャンであった中村さんのために、お通夜の席で、教会の牧師が中村さんの詩を二つ読まれた。魂の純粹な高揚を示す美しい詩であった。3ヶ月して、ご主人から「七色に光った露」と題する中村さんの立派な詩画集を送っていただいた。

ひとつひとつ丹念に
積み重ねて行きたい
残る生命の時を
もう迷わないで
もう道草はしないで
光へと歩む

露草が

あんなに咲いて

空は明るい

中村さんはロマン・ロランの精神に長年養われ、理想主義的な気高い魂を持っておられた。たえず上にあるものを求めて、高い精神の世界に遊んでおられたので、その詩もまた気高い香気をふくんでいるように私には思える。6月13日にもたれた告別式は、いかにも中村さんにふさわしい簡素な清らかなものであった。私はなでこの花を献花し、「我はよみがえりなり生命なり」とキリストのみ名をとнаえて、中村さんの靈魂のために祈った。人との出会いは、まことに一期一会であり、人の命がはかなく、もろいゆえに、その短い人と人との出合いはどんなに得難くどんなに大切なものであるかということをつくづく思ったのである。6月のロマン・ロラン・セミナーで、発表者である私は、冒頭に、中村さんのために哀悼の意をささげた。そして、このような例会もまた一期一会の集いであり、与えられているこの生涯の時間を、ロランがソフィアへの手紙に書いているように、昨日よりも今日、昨年よりも今年と、よりよい人生を生きてゆくために用いたいと切に願ったのである。

ロマン・ロラン研究所から

受 贈 図 書

'80年度中に下記の図書を御寄贈いただきました。

- | 書 名 | 寄 贈 者 |
|---|-----------|
| ◎ 『現代の音楽家』
ロマン・ローラン
木村 莊太訳
二松堂書店 大正11年発行 | 石 田 喜枝子氏 |
| '81年度 | |
| ◎ Cahier Romain Rolland Cahier 24 | ロマン・ロラン夫人 |

Monsieur Le Comte

Romain Rolland et Léon Tolstoy

Albin Michel 社

◎ En Plein Vol Cahier 25

ロマン・ロラン夫人

Jean de Saint-Prix et Romain Rolland

Albin Michel 社

◎ Bulletin

同 上

Année 1969, 1970, 1971, 1973, 1974,

1976, 1978, 1979, 1980

以上3冊の会報誌

なお、ロラン夫人からの寄贈は井土熊野氏のご好意により実現いたしました。同氏よりロラン夫人の近影のカラー写真をお送りいただいておりますことをつけ加えて感謝いたします。（宮本正清 代 エイ子記）

友の会だより

ロマン・ロラン研究所のセミナーを兼ねた友の会例会は、現在までに通算 268 回をかぞえています。その活動状況は下記のとおりです。

1981年4月25日（土）

264回例会

第89回 ロマン・ロランセミナー

テーマ：ソフィアへの手紙 その2（1904～1905）

発表者 寺田 由美子

出席者 14名

ロランはパリ大学で音楽史を教えるようになり、ソフィアは初め

ての女兒を出産する。この時期、アルザス問題、モロッコ事件等で緊張した空気があったが、手紙の中でロランは「私は『インターナショナル』な魂の人々とでなければすっかり友達にならないでしょう」と書き、国境を超えたユニテをいかにのぞんでいたかが判る、と寺田さんのよくまとめられた発表があり、1905年に起こった革命に注目し、世界史の大きなうねりに巨視的な促え方をしていたロランが手紙の中によく表われている、と波多野先生の助言があって、出席者一同にも理解の深まるセミナーであった。

5月23日(土)

265回例会

第90回 ロマン・ロランセミナー

テーマ：ソフィアへの手紙 その3(1906～1907)

発表者 相浦 綾子

出席者 12名

ここに収められた37通の手紙を読み進むうちに、40才～41才のロランが、ソフィアをどれだけ深く信頼し、愛していたか、ということに改めて気付かされる。1906年に出た『ミケランジェロの生涯』について、更に刊行されつつあった『ジャン・クリストフ』の数巻について、ロランは魂の奥底からの打ち明け話をソフィアにしている。「じつにふたしかな人生において、一人の友に確信が持てることは、大きな楽しさです。」と書く。

ロランの手紙の中からヨーロッパの精神史が立ちあらわれ、世界的な潮流が滔々ときこえてくるような気がする、と波多野先生が結ばれた。

6月27日(土)

266回例会

第91回 ロマン・ロランセミナー

テーマ：ソフィアへの手紙 その4（1908～1909）

発表者 大橋 哲夫

出席者 14名

開会の前に、去る6月10日に急に亡くなった古くからの会員中村佐多子さんに、一同で哀悼の祈りを捧げた。

『ジャン・クリストフ』刊行、ポール・デュパンを見出して世に紹介、などロランの活動はつづけられるが、H・Bという女性との結婚問題がおこり、自身の再婚について深く悩む。結局、相手に対する思いやりは深いが自分の気持に合わないものは断ら切る、というロランの生き方に従ってこの結婚は断念される。

1908年にはスイスのシェーンブルンにいるロランの許へソフィアが訪ねてきて再会するのであるが、大橋氏の詳しい解説と相俟って、ロランの面目躍如という感じ、内面を吐露している手紙という点で、この章のあたりがピークかと思われる。

9月26日（土）

267回例会

第92回 ロマン・ロランセミナー

テーマ：ソフィアへの手紙 その5（1910～1911）

発表者 杉本 千代子

出席者 16名

レジョン・ドヌールを授けられたために雪崩のように手紙がくるようになったこと、『ジャン・クリストフ』が英訳されること、交通事故に遭ったことなど、ロランの身の上にはさまざまのことが起るが、年代順にこれら外的なできごとをまとめて述べられたあと、杉本さんはこの書簡集を読むとき、ロランの片道書簡であるためにソフィアのそのときどきの返事や反応を想像しながら読み進む興深さに触れ

られた。

そして何といっても杉本さんの最大の関心事として、ロランとソフィアの間では宗教に対する考え方が全く相反していて、時には激しい論争もあったと思われるのに、二人の友情の深い内面性をもつ純粹さ、そして真摯な愛情がいつまでも変らなかつた、という点にいたく心を打たれる、と結ばれた。いつもながらよくまとめられた好発表であった。

10月24日(土)

268回例会

第93回 ロマン・ロランセミナー

テーマ：ソフィアへの手紙 その6(1912～1913)

発表者 森 孝子

出席者 12名

交通事故のために意気沮喪し、不眠がつづいていて、この時期のロランは自分でも危機であることを表明しているが、ソフィアへの手紙を通して次第に立ち直ってくるロランが浮びあがる。

発表者の最も心惹かれる個所として、P. 505.上段の
— できるかぎりのことをしながらも、ある種の宿命観が必要です。
「こうしたものだ。いま私の心に起っていることに一つの深い理由が、私の発展の一つの法則があるにちがいない。私はそれを知らないが、私はそれに服従し、信頼してまつ。Dum spiro, spero. 生きている限り、私は希望をもつ。」

を挙げられた。

日本では明治が終って大正になる時代、そして中国では辛亥革命で清朝が亡び、袁世凱を大統領として中華民国が成立した時に当る。世界史的な背景を考え合わせて読むとき、ロランの手紙の視野の広さが思われる。

アヴニュー・ロマン・ロランと名づけられている一筋の細い、静かな道を、黄いろい葡萄畑から碧い湖のほうへと、一度右に折れ、すぐにヴィラ・オルガの庭沿いにまた左に折られて、なだらかな坂をなしているその道を歩く。道に敷きつめられた黄いろい落葉の絨緞が私を導いてゆく。たくさんの樹木のある広い庭には、一つは白く、一つは樺いろの、二つの建物があって、この二つの建物ヴィラ・オルガとヴィラ・リオネットでの、ロマン・ロランと令妹マドレーヌとのかつての日々を偲ばせてくれる。坂道を最初に曲るまえに、一本の古い胡桃の巨木が目につく。ロマン・ロランが日々伴侶として語りかけた胡桃の老樹に、あの『内面の旅路』を献げたことを想う。黒い鉄の扉のついた門のところには、白い字ではっきりと、<ヴィラ・ロマン・ロラン>と標示されている。このブラックがすでにある種の不在の証しなのだ。その傍には、丈高いポプラがすでにその葉を落して、裸に近い枝々を明るい空のほうへと伸している。二つの建物がどんなふうにも手を加えられたのか、またはその危険を多少は免れ得たのか私は知らない。けれども、広い庭にのこっている数本の巨木は、おそらくロマン・ロランその人が『内面の旅路』を書いた日々を面影を、なお今日に伝えてくれているものと思う。午後、湖沿いにシヨンの城まで歩く。道沿いの木がどれも秋の終りを告げている。ずっと遠くには、ダン・デュ・ミディの山頂が白雪に輝いている。城の近くで小さなスケッチを一つ試みた後、城内に入った。城のなかというものは外からみると違って、牢屋とか拷問の部屋とかいうものだけではなく王の部屋も王女たちの居間も、どの部屋も寒さむとしていた。城のまえの小さな土産物屋で、あの子が持ったらよろこびそうな、小さな、花の絵の七宝の腕飾りを買った。城からの帰りにもう1度、オテル・ピロンの裏からこんどは坂道を登って、ヴィラ・ロマン・ロランをみに行く。そして、山側のはずれの、土塀近くにくろぐろと生えて、まだ葉をつけている胡桃の老樹を写生した。

*

朝、目醒めると、レマン湖の上には雲一つない。遠くダン・デュ・ミディの山頂まで、射しはじめたばかりの陽の光を受けている。窓を開くと、空気が冷たく爽やかだ。朝食のあと、あなたや子どもたちへの便りとともに、昨夜書いた数通の絵葉書を郵便局に持ってゆく。そのまま、気分よさに誘われて、船着き場のあたりをすこし散歩する。ここでは絶えずロマン・ロランの不可視な現存が感じられる。

あとがき

核兵器・安保・靖国・教科書・憲法そして原発・自然破壊・金権癒着それから…。政治の流れは、変わりそうにない。連日、その絶大な威力を見せつけられて、自分たちは、どうしてこうも無力なのかと思う。このような日々の中で、ロランの社会的発言の記録を読む。精神的な力強さと、その姿勢の凛々しきさにおいて、人類の師表だとの確信を深める。そこから勇気と、時には魂の浄福をさえ与えられて、改めて日本と世界の現況に対峙したい。

しかしもう一方には、ロランが《音楽は娯楽的な芸術であってはなりません。それは精神的な力です。》（『したいソフィア』）と語りかけた世界がある。ロランにあっては、かけがえのなかった音楽の世界だ。ロランと音楽・ロランの音楽！ 渴を癒さないでいたのは筆者だけであろうか。

遅れていた本号は、清水先生から《ロランのバッハ》を頂いて、誇りと期待をもって、お届けする。先生は、核兵器廃絶声明に因んだ多忙なお仕事の中で、本誌のためのこの稿をお書きになった。ロランと清水先生によるバッハの音楽への深い考察、さらには美しい文章に触発されて、読者は、バッハへの関心が高まるのをおぼえるにちがいない。ここで考究されている《死》は、現代の個人の生存を考える上で、核兵器から身近な事故・事件にいたるまで、あまりにも痛切なテーマだ。（なお先生には、本稿に先だって《ロ短調のアダージオ — モーツァルトとロマン・ロランをめぐるの一考察》雑誌『理想』1981年12月号がある。）

南大路先生から、今回も《マルヴィーダ＝補2》を頂戴した。当初の連載予定が終わったあとも、こうした書簡の全容へ近づけるのがうれしい。

また大橋さんは進んで、ロランの友・中村佐多子さんへの追悼文をお寄せになった。ここでは、筆者が重ねて故人について多くを語ることは許されないだろう。ただ、急逝されるまで、榮譽や社交を追い求めることのない、控えめな人柄のために、様々な労をつくされても、十分には理解されなかった。一貫して、内面の充実と真摯な生活態度を保たれた稀有な人であったと思う。逝去されたあとには、優しいご家族によって完成された、見事な『詩画集』と、充実して美しい生活の醸し出す感銘を残されたのだった。

編集部 織田和夫

投 稿 歓 迎

- ロマン・ロラン友の会の会員であれば、誰でも自由に投稿できます。現在のところ枚数の制限はしておりませんので、何枚書いて下さっても結構です。ただし、掲載の都合で何回かに分けたり、適当に削ったりすることがありますので、ご承知ください。
- 原稿は必ず、400字詰、または200字詰の原稿用紙に横書きにして、ロマン・ロラン研究所あてにお送り下さい。
- 締切り日は特にもうけておりません。年2回発行を原則としておりますので、随時、お送り下さい。
- 原稿を掲載した方には、原稿料に代えて、当該「ユニテ」を5部贈呈いたします。

「ユニテ」編集部

ユニテ 第3期 第14号

発行日	1981年10月31日
発行所	財団法人 ロマン・ロラン研究所 京都市左京区銀閣寺前町32 TEL (075)771-3281
印刷所	昭和堂印刷所 京都市左京区百万遍交差点

KATAYAMA BUNKO:

- /RR/K/1/ Rolland, Romain: Jean-Christophe I. (Albin Michel, Editeur, Paris, sans date)
- /RR/K/2/ Rolland, Romain: Jean-Christophe II. (Albin Michel, Paris)
- /RR/K/3/ Rolland, Romain: Jean-Christophe III. (Albin Michel, Paris)
- /RR/K/4/ Rolland, Romain: Jean-Christophe IV. (Albin Michel, Paris)
- /RR/K/5/ Rolland, Romain: Jean-Christophe V. (Albin Michel, Paris)
- /RR/K/6/ Rolland, Romain: Jean-Christophe Tome I. (éd. Albert Guillot, Paris, 1948)
- /RR/K/7/ Rolland, Romain: Jean-Christophe Tome II. (éd. Albert Guillot, Paris, 1948)
- /RR/K/8/ Rolland, Romain: Jean-Christophe Tome III. (éd. Albert Guillot, Paris, 1948)
- /RR/K/9/ Rolland, Romain: Jean-Christophe Tome IV. (éd. Albert Guillot, Paris, 1948)
- /RR/K/10/ Rolland, Romain: Jean-Christophe Tome V. (éd. Albert Guillot, Paris, 1948)
- /RR/K/11/ Rolland, Romain: Jean-Christophe (éd. Albin Michel, Paris, 1950)
- /RR/K/12/ Rolland, Romain: Jean-Christophe III. Antoinette -- Dans la Maison les Amis. (Librairie Ollendorff, Paris, sans date)
- /RR/K/13/ Rolland, Romain: Colas Breugnot. (Ollendorff, Paris)
- /RR/K/14/ Rolland, Romain: Colas Breugnot. (A. Michel, 1952, Paris)
- /RR/K/15/ Rolland, Romain: Clerambault. (Ollendorff, Paris, 1920)
- /RR/K/16/ Rolland, Romain: Pierre et Luc. (Ollendorff, Paris)
- /RR/K/17/ Rolland, Romain: L'Ame Enchantée I. Annette et Sylvie. (Ollendorff, Paris, 1922)
- /RR/K/18/ Rolland, Romain: L'Ame Enchantée III. Mère et Fils. (A. Michel, Paris, 1927)
- /RR/K/19/ Rolland, Romain: L'Ame Enchantée. (éd. Albin Michel, Paris, 1934)
- /RR/K/20/ Rolland, Romain: La Vie de Tolstoï. (Librairie Hachette, Paris, 1928)
- /RR/K/21/ Rolland, Romain: Millet. (Duckworth and Co., London; E. P. Dutton and Co., New York)
- /RR/K/22/ Rolland, Romain: Mahatma Gandhi. (Librairie Stock, Paris, 1924)
- /RR/K/23/ Rolland, Romain: La Vie de Ramakrishna. -Essai sur la mystique et l'action de l'Inde vivante.- (Librairie Stock, Paris, 1930)
- /RR/K/24/ Rolland, Romain: La Vie de Vivekananda, et l'Evangile Universel. I. (Stock, Paris, 1930)

- /RR/K/25/ Rolland, Romain: La Vie de Vivahananda, et l'Évangile Universel. II. (Librairie Stock, Paris, 1928)
- /RR/K/26/ Rolland, Romain: Pécuy I. (A. Michel, Paris, 1924)
- /RR/K/27/ Rolland, Romain: Pécuy II. (A. Michel, Paris, 1924)
- /RR/K/28/ Rolland, Romain: Le 14 Juillet. (Hachette, Paris, 1904)
- /RR/K/29/ Rolland, Romain: Théâtre de la Révolution. -Le 14 Juillet. Danton, Les Loups- (Ollendorff, Paris)
- /RR/K/30/ Rolland, Romain: Liluli. (Ollendorff, Paris)
- /RR/K/31/ Rolland, Romain: Le Jeu de l'Amour et de la Mort. (Albin Michel, Paris, 1925)
- /RR/K/32/ Rolland, Romain: Le Jeu de l'Amour et de la Mort. (Albin Michel, Paris, 1925)
- /RR/K/33/ Rolland, Romain: Parues Fleuries. (Ed. du Sablier, Paris, 1926)
- /RR/K/34/ Rolland, Romain: Les Léoniades. (Ed. du Sablier, Paris, 1928)
- /RR/K/35/ Rolland, Romain: Les Léoniades. (Ed. du Sablier, Paris, 1928)
- /RR/E/36/ Rolland, Romain: Beethoven. -Les Grandes Époques Créatrices /Le Chant de la Résurrection- "La Messe Solennelle et Les Dernières Sonates" (Edition du Sablier, Paris)
- /RR/K/37/ Rolland, Romain: Beethoven. -Les Grandes Époques Créatrices /Le Chant de la Résurrection- "La Messe Solennelle et Les Dernières Sonates" (Editions Du Sablier, Paris, 1937)
- /RR/K/38/ Rolland, Romain: Beethoven. -Les Grandes Époques Créatrices I. De l'Héroïque à l'Appassionata. (Editions Du Sablier, Paris, 1928)
- /RR/K/39/ Rolland, Romain: Beethoven. -Les Grandes Époques Créatrices II. De l'Héroïque à l'Appassionata. (Editions du Sablier, Paris)
- /RR/K/40/ Rolland, Romain: Goethe et Beethoven. (Editions du Sablier, Paris, 1930)
- /RR/K/41/ Rolland, Romain: Musiciens d'Autrefois. (Librairie Hachette et C^{ie}, Paris, 1919)
- /RR/K/42/ Rolland, Romain: Beethoven. -Les Grandes Époques Créatrices. La Cathédrale Interrompue. I. La Neuvième Symphonie. (Ed. du Sablier, Paris, 1943)
- /RR/K/43/ Rolland, Romain: Beethoven. -Les Grandes Époques Créatrices. La Cathédrale Interrompue. II. Les Derniers Quatuors. (Editions du Sablier, Paris, 1943)
- /RR/K/44/ Rolland, Romain: Beethoven. -Les Grandes Époques Créatrices. La Cathédrale Interrompue. II. Les Derniers Quatuors. (Editions du Sablier, Paris, 1943)
- /RR/K/45/ Rolland, Romain: Beethoven. -Les Grandes Époques Créatrices. La Cathédrale Interrompue. III. Finita Comœdia. (Edition du Sablier, Paris, 1945)
- /RR/E/46/ Rolland, Romain: Empédocle d'Agrigente. suivi de L'Enlèvement de Sinoza. (Editions du Sablier, Paris, 1931)